

赤瀬川原平

《模型千円札Ⅰ》



赤瀬川原平(1937-2014)
《模型千円札Ⅰ》

1963年
インク・紙(印刷物)
7.4×16.1 cm
平成27年度購入

昨

年度、赤瀬川原平(一九三七―二〇一四)の作品が当館のコレクションに初めて加まりました。芸術家、漫画家、イラストレーター、小説家、エッセイスト、写真家など多面的な活動で知られる赤瀬川は六〇年代前半、高松次郎、中西夏之らとともにハイレッド・センターという前衛美術のグループを結成していたことでも有名です。高松、中西の作品は既に所蔵されていますので、今回の収蔵でハイレッド・センターの三人が所蔵作品のなかでようやく集結を果たしました(ただし高松においては、ハイレッド・センターの活動時期の作品をまだ収蔵していません)。

このたび収蔵したのは、赤瀬川の「千円札事件関係」の作品・資料群です。掲載図版はそのうちのひとつ、《模型千円札Ⅰ》(一九六三年)。これは赤瀬川の個展「あいまいな海について」に際して作られたもので、展覧会情報の書かれた面の裏側に緑色の千円札が原寸大で印刷されています。赤瀬川は本物の紙幣であるかのよう

に留まるものではなく、つたのです。

赤瀬川は、《模型千円札Ⅰ》を制作したのち、更に複数のバージョンの模型千円札を印刷し、そしてそれらを事物の梱包に用いてオブジェ作品として展示したり、テレビ番組内のパフォーマンスで燃やしたりしていました。やがて、この千円札の存在は別件を捜査していた警察官に偶々発見され、赤瀬川は「通貨及証券模造取締法」違反のもと一九六五年に起訴され、法廷で争うことになったのです。法廷では、ハイレッド・センターの作品群が証拠品として陳列され、法廷が展覧会場のようになつたり、弁護側の証言者である批評家たちが自らの芸術的知見を次々と披露するため、講義の場のようになつたり、あるいは法廷外でも侃々諤々の議論が重ねられました。その結果、法廷闘争やそれに付随する言説空間が、富井玲子氏の言葉を借りれば、「一種の(作品空間)」としか形容できない事態となつたのです。つまり「模型千円札」そのものが自律した作品であるというより、その制作に端を発した一連の過程が芸術的实践と捉えられるのです。なお、赤瀬川は一九六七年六月、懲役三ヵ月、執行猶予一年の一審判決を受けました。法廷はこれらが芸術的評価を受けるものだとしても、犯罪であるという判断を下したのです。

(企画課研究員 榎田倫広)